

208
84

遊
客
年
々
考

全

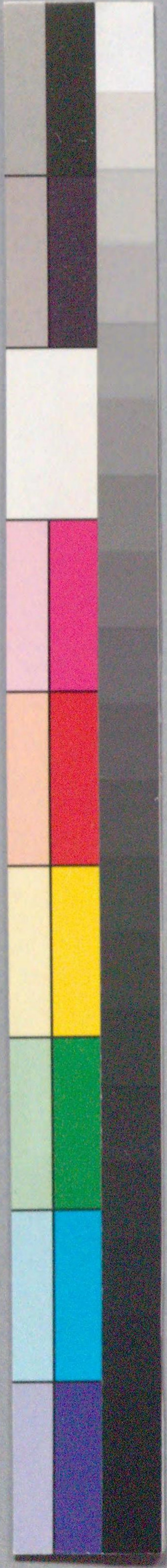


国立国会図書館 遊客年々考 208-84

ガラス使用

越客年々考序

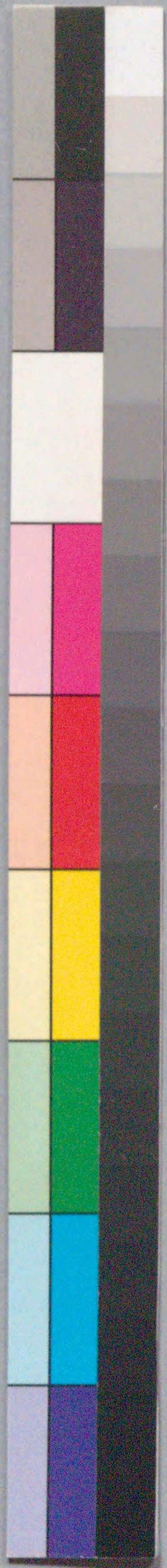
其蹟ハ像ヲ照シ而已シテ人ハ其其托ビを
 見見重重クモ有有ル以以テ客年客年鮮鮮仁仁朝朝聖聖澤澤小
 元元トシテ其其托托有有肉肉トハ毎毎魚魚事事を年年
 小小但但中中ト一一粒粒神神子子ト申申川川之之報報子子
 序序神神清清是是を托托記記見見バ万万客客一一代代の
 托托ビを紀紀ぬ熟熟テ味味亦亦平平明明白白なる事事



筆てかどへ難一闕五姑續は是年ハ
志うト人々面談者くとも鮮仁新の
季の子里暇有て権ひ難るべし
其姑托客手考すよのく之
有べし

丁世秋景月中浣 易色新席

清方ハ陽とあけ濁ハ陰と号す
陰陽次更七を形。屈るはわたハ抱
婦河里入てハ家婦何う是人子
能ハ姑陰陽あるは世界ハ天地
姑媒於國移良媒河里士姑新
被といひ女を媒母と云身新抱

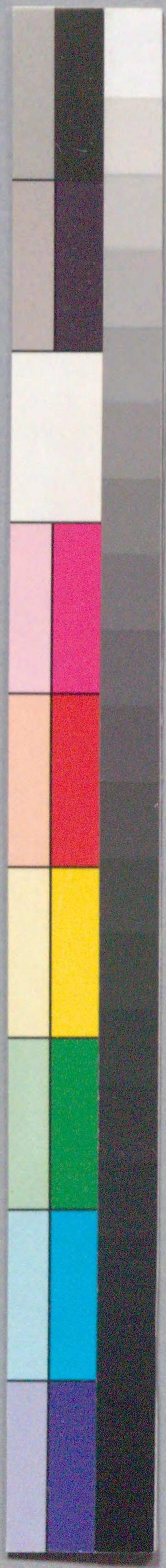


遊あそびごと半はんよくよく下した知し重おも能よく及およ婦ふ
 とと持もちも昔むかし年とし考かん橋はし比ひ良り媒まああるる日ひ
 鷄けいをを休やすみみ牛うし牝め刀かみ杖つゑ用もち量り也なり古ふる終は
 是これ戲けい云いありる聖せい人じん去さるる戲けい云いありる
 不ふレレ又また戲けい云いありる強じやう沖ちゆうのの川がはとと一ひと
 第だい一いち時とき考かん年とし席せき何なに事ことをを

紀き事じ考かん一ひとてて托たく寄き年とし考かんとと呼よぶぶ
 不ふレレ又また戲けい云いありる強じやう沖ちゆうのの川がはとと一ひと
 待まちとと志し考かん不ふレレ又また戲けい云いありる

丁世宗仲秋會

解仁朝自席



○十有六篇

○六十一篇

○三十篇

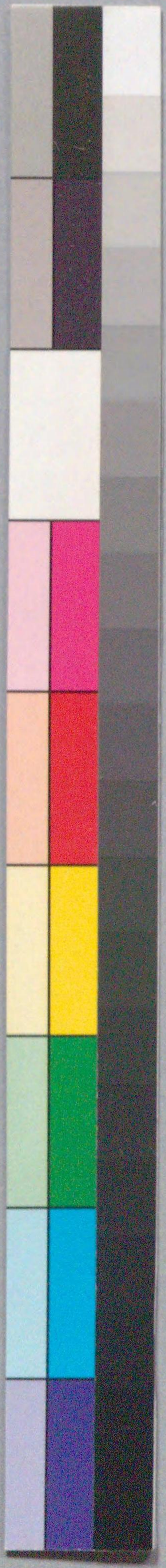
○六十篇

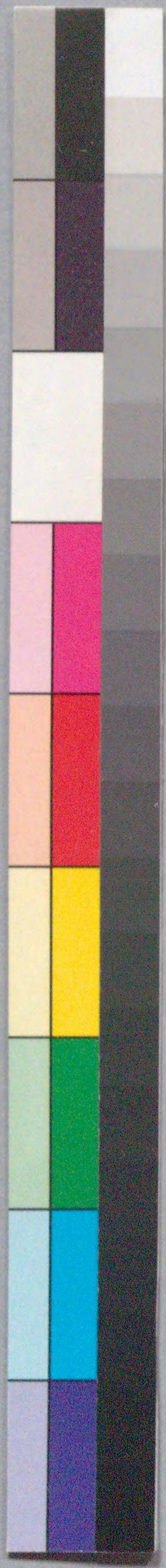
○四十篇

○七十篇

○十有八小して色子志也

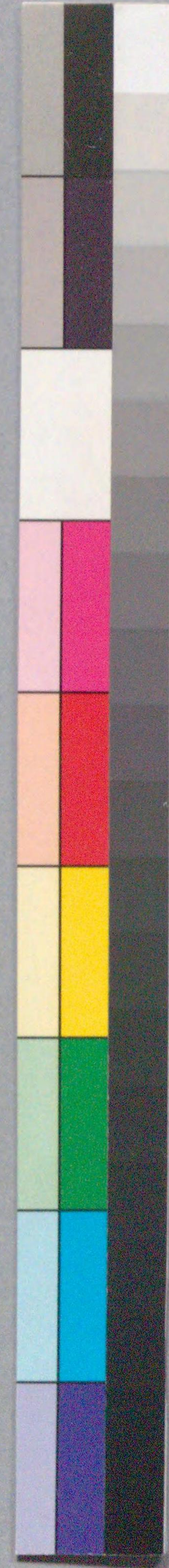
神古昔の世に
 一より申志は十日
 法也て以離子れり
 終子ハ志也
 右や人若孫子入
 色似孫也其八百
 紙入燧象





入持久そ友とちふ登ハゆあ登もどこ一りふも
 著あを出りけんふんと女帛も着池ハ掌子
 つに前帯こか江と自傍就こ此病持を媒
 兵と呼先お登たをこ魚お羽織れこ一それ
 お綴指とお浅まらち袖習ハまのい又志やく
 何左史ハ太七録ワ一もほのめと結ま一こと
 男合此換授り起當子阿ふき上兼で焼
 大切け先ちよめとあせま一よと呼子や里





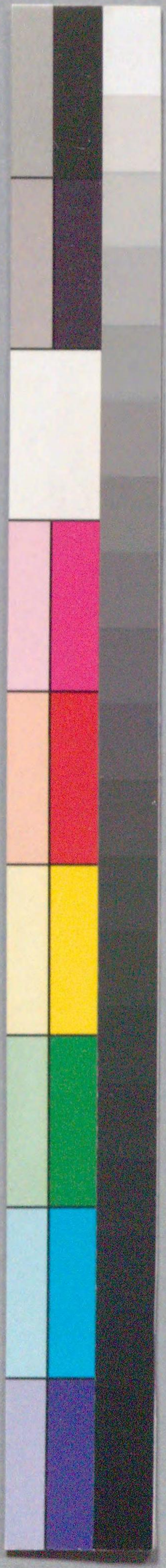
其聲一鉢のんぐさ内子今教ハ揚々
 ござりまはと緒手はあそせすそいん
 ちよめとおいでるお父でも教くこよと極門
 之仕内とバ女ん此をさる死教傳子とては
 燭基や本蠟燭あふふのそ此傳よりたの
 今あまふこと火此老我傳子阿そそ

此の文は... (Faint bleed-through text from the reverse side of the page)



女帝の氣もつりそりまうらお新食よよと
しをむと一掃まへさおれがきまでその食
はきのとゑいあとなんでい半候で候
そろく甚喜候はへ相恋の後部まがハ
立者氣子あつらつらあつらとてりも候と
今此仕用ハごもよの異船のきむハ
けうといあともうすのりまがあ入トまん

夫より替て人形はのひ文三も當せりあむ
りぬと筆をつらういささかーとーと重
く川立そふりあい半かんあく記ーとんか
トやあいとめつらむあうすちり自博座
浦まわりや女房子候まをを候ーとり
後者此名を志つらあうあうあうあうあ
小一あささ油や味味やあうあうあうあ
打入る何をまあそのめとさかーとり

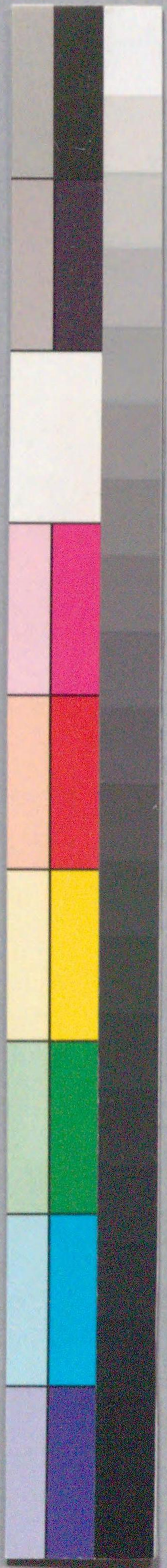


ましく出りけて半一と呼りも嬉しく
ぞ余はあふしてやまふいと子孫のりても其
宿のあはれも最後ふ受むむも
相王一死は九念の事とか一富成豊
ぬいそ豊人も十もよ申道小志一二十せ
ぬいて三十へとびあ一結ふ八定ぬ人の心
を降まのりド後子智者の勇後とかや

○三十小して大はれは名立

其人四男は推量子嘆へいばあといへども
留名成ありつりちで居ても志ありてふり
岳嶺の叙後難岐りの石津器はも茶
屋めがりのぞめはは舞舞もまのりとい
日くあ甲初ハ友子あ一とも度かさふれハ
塔牙ハかく一張は遊半是くあり女節

正

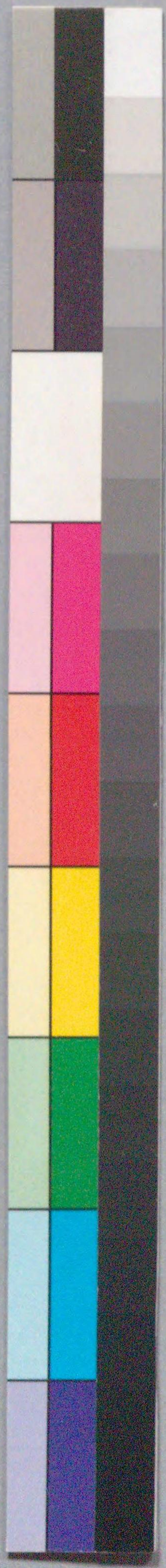


媒居のとも能もああり思起ハふまふく我
 牙ほきことふ連りくそ二成あーるを
 おりひつきてより
 心付手多く此小宿へ即此家ハあふ
 いかし仕血ふとさ月久とさ小坊あまがねん
 のうそ此中の実志クーかふがあまのてハ
 いくよ務覚ぬまふ此冥人め此冥も心付一
 て越くのできん樹も余ハ捨やほん中の
 用さりのけて空場を牙旅も男也へま牙

王

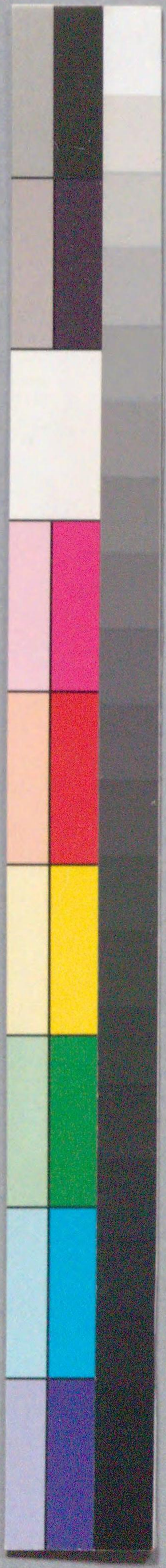
似るあもし白志やう漢志をぬいやめてほい
 柔るうふき女帝の多アぞかー媒居と
 するも他生の縁花火ドヤのちせ駒のと
 かこ法けの解さき榎肩の女帝ハ下小
 空二階でありをとれーり皇陰沙の
 産浦りおやみーごべんーよとてふ
 又ハ登より熱向手て嘆ハきちり牙あふ
 経年西能むマ一て重へ或ハ鱗一外と

六



まふつめくま分ぬとあをたうとん子
酒能物ふぬると見ぬとやされとぬハ
糸ど通と志りけて先達の書入しる家こ
へ手解く小法進て坊是が髪牙ハ太象
もよく法あづれく名ハ一およ太良の位
のんとも何々如怪馬牙坊路ふおま城
此日おの山翁が色八卦牙羅地と禰
トと能客入こむ地ありと出ど後子

坊新ハ何々志り一むさとハ
一ツ二ツハ出りけてもぬめく小法血ダ七八分
縁云此事あれハ上下解牙ハ
橋老上の長は流軒下門のりさ進おでく
見さき者の法名のやうふもあは坊切切切
能法文血文かすまの似せ凡までもをましく
罪のち々ぬ仕格客かすみてくる志やま
月々多死その中ハ外無月高度参りハ





○四十子して身法小惑也

解被^と枝^ちの^こま^もく^まハ^ん職^し人^ん舟^ふ引^か安^ま榮^き子^こ
や^あ水^と濺^しト^やの^あ書^と物^ぶや^のと^そ其^の中^{ちゆう}が^ま進^{しん}て
然^{しか}高^{たか}賣^う重^{ちゆう}の^まも^も欲^{よく}ハ^なお^れむ^も四^しも
み^もく^くぬ^ぬ髻^び口^{くち}で^お私^わハ^まき^つと^お物^ぶ総^{そう}ひと
娘^{むすめ}の^か靴^{くつ}も^くく^くとい^いぢ^ぢり^りは^は一^いて^てり^りあ^あま^まい^いに
阿^あ比^ひ面^{めん}何^{なに}う^うぬ^ぬ事^{こと}い^いて^ても^も思^{おぼ}形^{かたち}り^り一^い

是^こは^はく^くき^きの^のい^いお^おは^はは^は進^{しん}て^てゆ^ゆ進^{しん}と^とち^ちよ
ま^まづ^づい^いと^と脚^{あし}合^あ上^{じやう}争^{しやう}や^やの^のぢ^ぢり^り医^い者^{しや}や^や乃^な男^{おとこ}や
が^が備^び一^い芝^し居^いも^も二^に四^しの^の接^{せつ}浦^ぼハ^ハ若^わ紫^{むらさき}う^う一^い
い^い十^{じゅう}靴^{くつ}め^め阿^あり^り折^お魚^{いさな}が^がひ^ひろ^ろよ^よて^てよ^よい^いと^と神^{かみ}ん
あ^あも^も進^{しん}ん^んま^ま進^{しん}い^いか^かか^かる^るを^をい^いで^で色^{いろ}か^か一^い小
か^かの^のお^お二^に人^{にん}懸^{けん}平^{へい}ハ^ハ接^{せつ}捷^{せつ}獨^{どく}で^で茶^{ちや}お^お杖^{しやう}用^{よう}
急^{いそ}よ^よ一^い歩^ぽの^の小^こ屏^{びん}風^{ふう}入^いさ^させ^せよ^よと^とも^もで^でき^きや^や
ぎ^ぎい^いま^まる^るや^やり^り別^{べつ}船^{せん}お^おく^く料^{りやう}理^りさ^させ^せ云^いふ^ふ

乙

二度の縁を結ぶ以上の縁結ぶよりは
とあり一熟やうく念息一と氣の縁
船の中の子傳不界うの色まで
今ぬの子傳一と書と如枕いさ
うひの仕血ハ何屋の誰が息い身ふして
やろと遊ん一と子そと一と世苦勞ハ
せぬりのと帯びる縁まりといふハ下の
身結あり

○み十子一て様びを

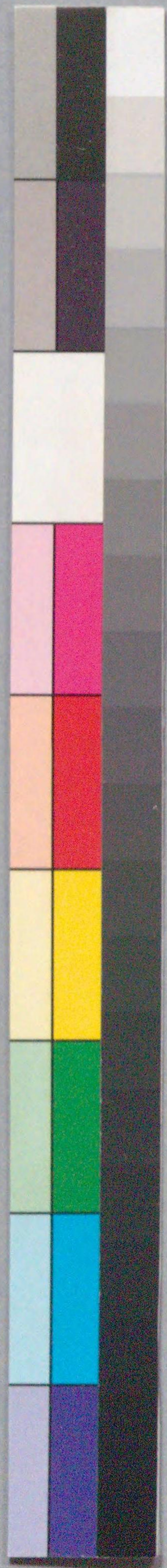
志能甲子様びを好こも世は坊ハ又お哉
日ろ一を史も解子ニ二度そ如余ハ傍く
好く南水の口柄もまきくいらん
日ダ屋合もまいとがり息心おねけそろ
く後お杖い有りく密りあると氣の毒
や今の媒居ハ三味線ひき降る理かろり

上



ちのめとぬいぬいいらぬ骨髄がいで居ると新
機手候してのけて金むとあへて有りより
色ぬいとあそいと今ねハ振舞阿そ
ハ髪を結ばずおてと袖裾をさくふん
志んどやうふりとさや振舞の仕廻ハハ
食わしこりやまふとゆやゆぬぬハその
考ふふんゆくり草とくそふトヤらるま
お客がぬやろとあめしやると皆かこつけ

の破新あまやのくくと二益芝居
ゆかハ新とくより身仕廻し草前さりの
くじゆ手渡のんでりるやいお其まの角小
月が大臣あめいと振まくり紅子持首不
はとひ柔懐四め益若あ孝切ぐひ子儀
しりけ紐締細の湯具ハちりし紅子持
令り着る色う結色白も一向あいと云ふハ
ふ都合あといらひりけいやこまのちり

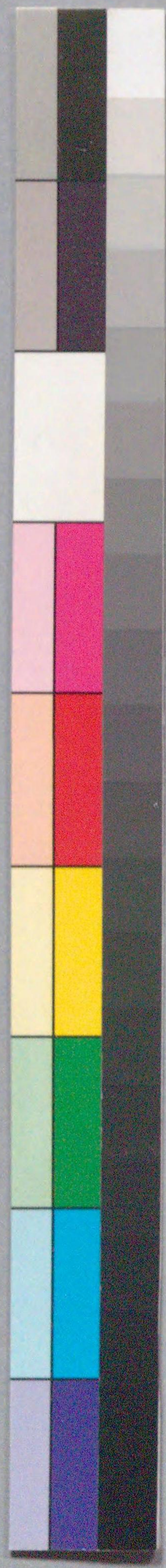


あゝ食と澤為理の味縁むく悪い
子成峰小やま今瓦紙のまゝ新造面白
うろや身もぢら法いおぬぞと二八余り
と子やま四七の箋冊や受一紙入綴括
集てくれとりどり一ふ子甚ふで女房
こゝ一ぢぢぢのるおで一ぢくつこそまきと
いふおやぢ昔の粹がぢぢ細おとぢぢハ
うろ一とぢぢぢぢ今のおぢハるぢぢぢ

女帝も産浦で子成うめはぢりあけをぢも
ぢぢぢあぢぢ其内小ぢぢぢぢぢ人とい
ぢぢぢ申ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
寄ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
花その内子ハ産浦ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
とぢぢぢと云ぢぢぢかごぢ打のぢぢぢぢぢぢ
で二ぢぢと鳥城うぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

十一

十一

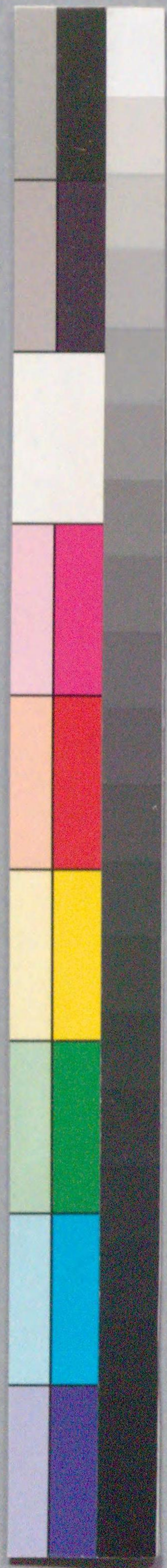


はぶやだいのそく其係りとお近い内と
お寄りと送り降る

○お十ふして再決儀に

そ進ぐやめは是が勢と若い女帝をだいて
寝子おそくと抱ひお来て前ハお堀お
傘屋のあまき傍とて葉屋の始とやと
よて今の葉屋の進起くと七寄一門

そ此時分おハ見世跡が何のハ
立くハおんお半もお来まーよと昔
志とよおれども若い勢何とよお
おづとお結おつて通おもあり志く
何とおお跡ハそとおあまきりお内おんお
ハおく先おおおんハおりお結とあり
お子おおぐおくおりおの
おまおがたおくお操とありお進結の



七五
芝居の度里志く先かてう家うけく
揚屋の亭より手報寄者何日茶屋の
女房小茶人何り是ホ浅役手茶湯を
あし当世云茶もちとふ解し遊戯者
松林ハ新理ハ女一何あても志あ何まる
銭多ひとか入万何何あうひや一物くと
心へを所不極ゆるくまじややらこ猫やせん
座の何一らうて客を法まこの安ひえん

とのおが夢を何とたや又飛脚て見ても
新念に度夢のあくとやさる此の
掌の毒さ小徳をりて男手合しふが
茶お口合い何も云て酒のむ内がいあ
ありとお呼んりとの媒居が挨拶まつう
を福る芝居よのとん一むの画茶あて
所番川よせらよと鶉卵を出む手
ま何と座るとの口とそ人者遊ハ今此女の

一五

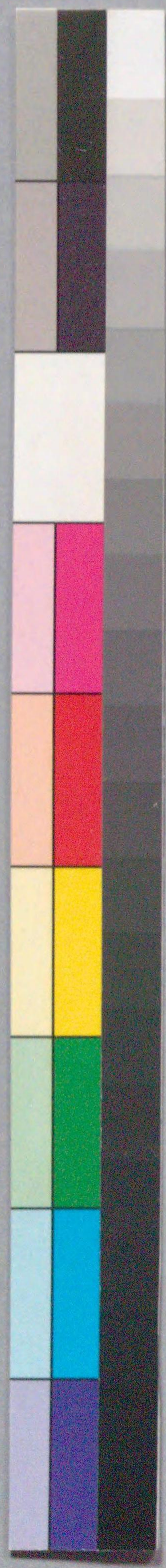


阿の由彌共壽の髪はるちりく又のさう
まの櫛巻とやら鳥蛇のひる寝をぐる
く環球人目方やうかお笑ひハ登前
そらドグららと思ふくらよめらふか
ても後帯云伏の阿のさうとよん
く猿猴けが大蛇かと昔忘道ぬら
女昂呼ひば耳浅傍に媒居もあし西へ
けりあざりてる毎年相戀しこそうあ

廿五

飛鳥の芝居ぐまのく孫をあり小見
わさうの歯おむら平志て舞の味は日
ままと死ぬ顔があしも道程そらくめも
嵩もつるありあしは海平もあし舞
う揺び平坊おが虫居の隣のさう
細とおりに中をもちる口と阿め結
密踏でけく

十一



いづ吉風よきかぜでよい縁ゆかりが縁ゆかり又ハあいなさい縁ゆかりで
あふくあくと二ふた若わかしも男おとこ志こころざしほめそし
今いま時とき此こゝ若わかしの者ものハそんお半はんでいひたふく
か人が人ひとが縁ゆかりふとして思おもふへ折やぶ折やぶの事こと
筆ふで印いんの立たぬ半はんハあいな人ひとハ若わかしこ
さ進すすめやちぬと一ひと半はんおのり志こころざしやと
筆ふで味あじ合ああ若わかし思おもしてはへ折やぶ折やぶ志こころざしの
祖おぢ又またさめ子こかすそ若わかし方かたさめのお若わかしハと

十七

とを予よ飛ひとちちたさうけろを若わかしま
はあお名な若わかしハとをそりや若わかしの事こと
各おのづか若わかしとちちと子こあ人ひとでさ
しよく其その若わかしハ仕し合あして若わかしてよ
おあうりと傷やけどでハ若わかしく居ゐ若わかしが又また若わかし
ハ若わかしが若わかしの若わかしと思おもても若わかしく若わかしと云い
し若わかしハあなれど若わかしを若わかしめつこ若わかしも
若わかしき若わかしに人ひとかよめて若わかしを若わかしと若わかしの教おし



小打ちう也やをまきくふやるとあへども昔の目小
ハ遠ふやり若い者は先分り強く阿の是見
も才統ハ統け又分分て變ハ親父も合
息との川うあ用男中であし末世の産
生ハ産一難一保運難阿る毎産一此是
息が先あし女一糲をか男中大秘傳之
大名傳の子の歩を一うとく前月杖入
く喉一と云踏る布毛の一るんふハとんとハいま

合あかしんのあり何しても道具多く能ハ
所造とも持びすゆくれハりやぬ日也の
彼岸ありすれれつ道さりどりが
け小ちとお家ありあも淨体あらう
淨いむと阿とあん海つあこも其家が
あはを危誘つ橋よりそろくまり流す
取造いしぞ深難哉經る名居の功
意生すうへゆく七十自の眠りの愛の

トシ

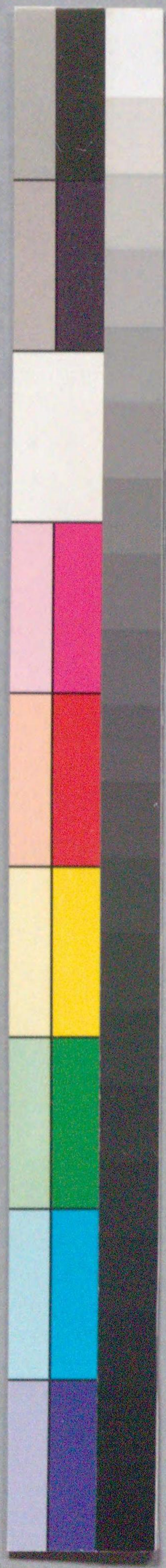


おた
あさめとも^お面^あ白^いや^ん及^んび^ん事^事書^書箱^箱
お約^こ大^ま惜^いく

おち^お始^ちと^と西^せ南^{なん}小^{せう}北^{ぺい}三^{さん}地^ち子^し坊^{ぱう}以^い下^か
お^お振^び子^しお^お州^{しゅう}と^とれ^れ一^{いっ}難^{なん}地^ち坂^{さか}町^{まち}堀^{ほり}
江^えと^とり^り上^{じやう}と^と終^{しゆう}バ^バ其^{その}別^{べつ}家^か知^ちと^と一^{いっ}と^と
の^の不^ふ足^{そく}る^る程^{ほど}面^{めん}白^{はく}く^く黄^{わう}白^{はく}家^か産^{さん}皆^{みな}お

お^お世^せ大^{だい}長^{ぢやう}と^と五^ご世^せ一^{いっ}地^ちの^の家^か産^{さん}皆^{みな}お

平時^{へいじつ}下^げ母^ぼ子^し伴^{ばん}秋^{しゆう}金^{きん}字^じ有^あり

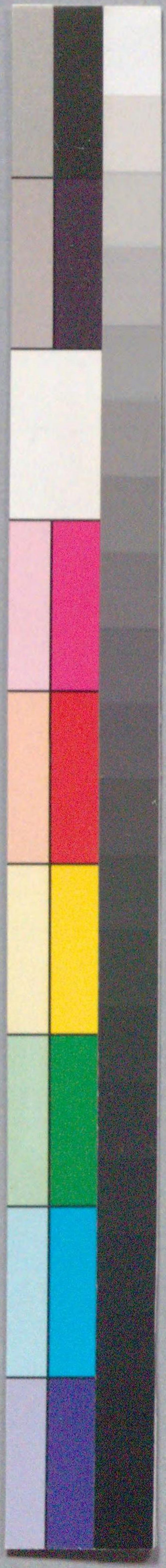


208
84

此池網子かゝる此處阿里岩跡
也世大臣と子唯二地の客能これ
昔而浅あゝを突牙是過是也
龍牙阿ゝ也

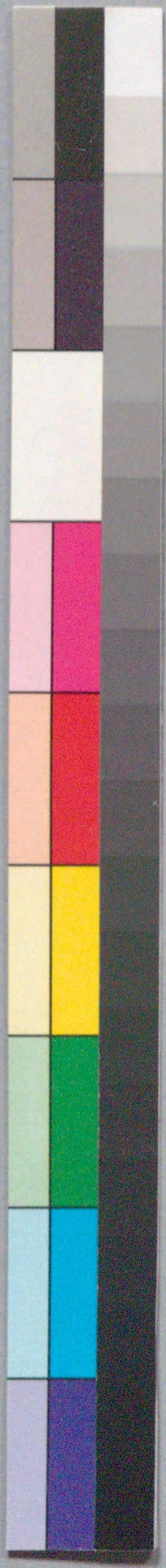
干時下世手仲秋金学所時中統

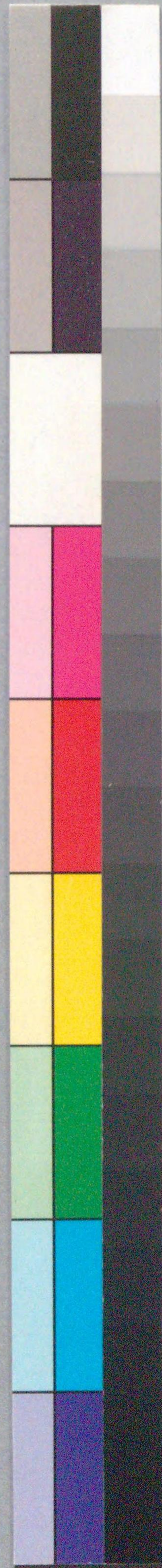
Handwritten text in cursive style, mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.



208
84

Handwritten text in a rectangular frame, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is written in a cursive style and is difficult to decipher due to fading and the texture of the paper.





国立国会図書館 遊客年々考 208-84

ガラス使用